

だが、彼がどんなところに似た部分を見いだしたのか興味を引かれ、もつと時間を空けるべきだったと残念であった。

本人に会ったことのない日本児童青年精神医学会のリーダーたちから、東田氏がFCではないかと疑義が出ていると聞いて驚愕した。何よりもこの本を読んでいただければ、これが自閉症者以外に書けるかどうかわかるはずである。東田氏の書く自閉症の体験世界は、たしかに自閉症の体験世界であり、健常者が書くことなど不可能である。また多めに自閉症に会っている専門家であれば、彼のような言語失行タイプには出会っているはずである。もつとも、一見最重度の自閉症にみえるので、その体験世界に対して興味があれば見逃してしまうかもしれない。まして上記のような書評子との会話がFCでやれるものならどうやってするのか教えてほしい。彼は自分でキーボードをたたきながら言葉によって質問し、それに筆者が言葉で返すという形で会話をしたのである。

日本児童青年精神医学会はいつからこれほど臨床から乖離したのだら

うか。学会の未来についての危惧もあつて、怒り心頭であるが、まずはこの本を読んでいただきたい。そうすれば、愚かな疑問など吹き飛ぶの

綾屋紗月十熊(合晋) 一郎著

『発達障害当事者研究』

ゆつくりしていねいにつながりたい

四歳のころから自分という存在に疑問を持ち続けていた著者(綾屋紗月)が、自分の障害(病気)はアスペルガー症候群の診断に当てはまると知ったとき、一時の安堵を得たが、ほどなくして表面に出てくる症状(言動の特徴)からアスペルガー症候群として診断されるのは、たしかにそうかもしれないが、なぜこのような症状が出るのか、これまでの学説を学んでも納得がいかないことに気づいた。そこで著者は同じ苦悩を体験している当事者との語り合いを通して、従来の(発達障害、自閉症)研究とは別の切り口からその概念をとらえなおしたいという強い動機に駆られて本書を書くことになった。その中でも特に、従来の学説でもコミュニケーション障害を一義的

ではないかと思う。

杉山登志郎

(すぎやま・としろう) 浜松医科大学客員教授

としながらも、当事者双方を問題として取り上げないところに強い疑問を持ったことが大きな動機であったという。

本書では、著者自身の体験を可能な限り詳細に記述することを通して、新たな仮説を提案しようという。その仮説は、著者ら自閉圏の間は「意味や行動のまとめあげがゆつくり」だとするものである。その理由は、均質の多量な刺激(情報)が身体内外から押し寄せる感覚飽和(大量に刺激が感受されすぎて、たくさん感覚で頭が埋め尽くされていく状態)により大混乱に陥り、自らの感覚と欲求を頼りに判断し行動することが困難な状態に陥る。そして、この身体(で感じる)感覚には「快不快をともなう気持ち」がつい

てくる。さらには、その体験は侵入的なものに感じられるために、恐怖が襲って来るという。

このように著者は独特な感覚(知覚)体験を詳細に論じ、かつその際の内面のこころの動きをも赤裸々に表現しているために著者の体験世界を読者は想像することができるといえる。

著者が述べる感覚体験とそれにつながる世界はどのように理解することができるのであろうか。ここでは特に著者が仮説として主張している「意味や行動をまとめあげることの困難さ」が生じるもととなる感覚飽和とそれに基づく意味の絞り込みの困難さに焦点を当ててみたい。

まずは、感覚飽和がなぜ生じるか、それを生み出す背景として何を考えなければならぬかということである。著者の苦悩は無限とも思えるほどの身体内外から生じる刺激が等価値のもとに自分の中に押し寄せて来ることであるという。「健常者」においては、通常当事者自身の



医学書院、2008年
2000円(税別)

動機、意図、ないし欲求によって刺激は絞り込まれ、それに該当しない刺激は背景化し、関心に沿ったかたちで対象は図化して、意味あるものとして知覚されることになる。そうした絞り込みが困難である背景には、当事者自身の動機、意図、ないし欲求が定まらないという問題がある。著者は述べている。「対人関係において常に孤立感を抱くとともに、心の中では人と繋がりたいという気持ちを抱き続けている」という。ここに評者は当事者の対人関係における「甘え」（繋がりたい気持ち）をめぐる強いアンビヴァレンスを容易に見て取ることができ、このことよって当事者は何か行動を起こそうにも、自分の欲求が定まらないゆえ、対象刺激の持つ属性も絞り込むことができず、必然的に当事者にとつての対象の持つ意味も定まらないことになる。よって、本書で述べられている当事者の感覚体験の特異性は、その基盤にもつ対人関係における「甘え」のアンビヴァレンスゆえに生まれているものであるということが推測されるのである。

これまで研究者の立場からのみ論

じられがちであった発達障害研究に、当事者が自らの体験世界を語るという手法は、研究そのものに大きな変革を迫るものであった。外からはみえない障碍ゆえなおさらである。しかし、当事者自身も今の自分の特異的体験の成り立ちにはわからないのだ。当事者自身の体験を自ら語る点ができるのが当事者研究の最大の強みであるが、自己の体験を他者の視点から捉えることができないために、どうしても当事者独特の意味づけをし、それを当事者が納得のいくように説明してくれる研究の知見（主に生物学的研究）によって補強しがちであつて、社会的・歴史的視点から理解するということは困難である。当事者にしかわからないことが多く、そこにこそわれわれが学ぶことは多い。しかしそれと同時に、当事者であるがゆえにわからないこともある。そこに当事者研究の陥穽が潜んでいることも忘れてはならない。

小林隆児
（こばやし・りゅうじ／西南学院大学大学院臨床心理学専攻）

子どものメンタルヘルス事典

「学問の世界」への最初の1冊
日評ベーシック・シリーズ

NBS
Nippon
Basic Series

清水将之 [著] | 本書は精神医学研究者用の事典ではない。児童精神科医療＝子ども臨床の日常業務に役立てる目的で書き下ろされたエンサイクロペディア。

■好評発売中／本体2,000円＋税 ISBN978-4-535-80652-7



- 【あ行】
愛情別室症候群／愛着／アヴェロンの野生児／赤ちゃん返り／赤ちゃんにやさしい病院 ほか
- 【か行】
絵画療法／外傷性ストレス症(子どもの)／家屋・樹木・人物描画検査 ほか
- 【さ行】
災害時子ども精神保健／再接近期危機／最早発性痴呆／里親／サヴァン症候群 ほか
- 【た行】
体外受精／胎学／胎教／退行／胎児期／胎児記憶／胎児性アルコールスペクトラム障害 ほか
- 【な行】
泣き入りひきつき発作／なぐり描き法／喃語／二語文／日常生活動作(ADL) ほか

- 【は行】
排泄訓練(トイレ・トレーニング)／ハイリスク新生児／バウム・テスト／白日夢／白痴 ほか
- 【ま行】
マザリース／マラー／未熟児／ミラー・ニューロン／無視／夢中遊行症／夢遊病／免疫寛容 ほか
- 【や行】
夜驚症／夜尿／遊戯療法／ユニセフ(UNICEF)／指さし／指しゃぶり／夢(子どもの)／養護学校 ほか
- 【ら行】
ライフ・イベント(子どもの)／ランダウ・クレフナー症候群／リストカット／離乳／療育／暦年齢 ほか
- 【わ行】
ワーキング・メモリ

〒170-8474 東京都豊島区南大塚3-12-4 TEL: 03-3987-8621 / FAX: 03-3987-8590 日本評論社
ご注文は日本評論社サービスセンターへ TEL: 049-274-1780 / FAX: 049-274-1788 <http://www.nipponyoo.co.jp/>